

第1回受賞者 宮城 まり子



昭和2年 東京都に生まれる
昭和43年 日本最初の肢体不自由児養護施設「ねむの木学園」設立
昭和54年 学校法人「ねむの木学園ねむの木養護学校」設立
「肢体不自由児(者)療護施設」という新しい制度が生まれる

静岡県小笠郡浜岡町に、日本初の肢体不自由児養護施設「ねむの木学園」を開設。全ての子どもの持てる才能を信じて活動する。そこで生まれた子ども達の優れた絵や詩は、多くの人々の感動を呼んだ。また、映画『ねむの木の詩』『ねむの木の詩がきこえる』は受賞者自らが制作・監督し、学園の子ども達の生き様を描いている。国内ならびに海外で数々の賞を受けた。

その後、「学校法人ねむの木学園ねむの木養護学校」を併設し、子ども達の生活と教育の両面を担う。また、子ども達が成人になると施設を出て行かなければならない現状を訴え続け、それが結実し、「肢体不自由児(者)療護施設」が国の新しい制度として作られた。



第2回受賞者 谷 昌恒



大正11年 東京都に生まれる
昭和20年 東京帝国大学理学部地質学科を卒業
堀川愛生園を創設
昭和40年 社会保障研究所に移り、研究生生活を送る
昭和44年 北海道家庭学校長に赴任(受賞当時)

敗戦後の放浪時、戦災孤児から物乞いをされ、「悲惨なものにすぎるもっと悲惨な子がいる」との思いを胸にする。

福島県棚倉町に堀川愛生園を創設。不毛の土地に簡素な小屋を設け、孤児たちと職員が家族同然に生活する家庭舎を始めた。

愛生園の事業を軌道に乗せ、研究生生活を経て、当時校長であった留岡清男氏の強い要請により、日本で唯一の民間男子教護施設である北海道家庭学校長となる。そこでは、学校や家庭からはじき出された12歳から17歳の子供たちが、よく働き、よく食べ、よく眠る、「三能主義」のもと生活している。彼らは教えるものと教えられるものとの真剣な対決を通じ、環境に立ち向かう力を育てられ、社会へと巣立っている。



第3回受賞者 児玉 三夫



※写真は代理出席した長男の伸雄さん

大正4年 鹿児島県に生まれる
昭和13年 東京帝国大学文学部教育学科卒業
昭和18年 明星中学校・高等学校教諭
昭和26年 東京都立大学助教授
昭和53年 明星学苑理事長、明星大学学長、同小・中・高等学校副校長

日本におけるペスタロッシー運動の開祖ともいえる沢柳政太郎、及びその門下生小原国芳からペスタロッシー精神による薫陶を受ける。大学卒業以来、56年間、教育者・教育学者として一貫した人間教育の活動を推進し、日本のペスタロッシー運動を理論的・実践的に継承発展させた。とりわけ、ペスタロッシーの生前に唯一刊行されたコッタ版『ペスタロッシー全集』（全15巻）を復刻し、『隠者の夕暮』草稿写真版を含む『ペスタロッシー参考文献集』（全2巻）を編集出版したことは、日本のみならず、世界のペスタロッシー運動にとって、はかりしれない貢献であったといえる。

第4回受賞者 山田 洋次



昭和6年 大阪府に生まれる
昭和28年 東京大学法学部卒業
昭和36年 『二階の他人』で初監督
昭和44年 『男はつらいよ』を発表
他に『家族』『同胞』『息子』『幸福の黄色いハンカチ』『学校』など監督作品多数

映画『学校』の中で、昼間の学校に居場所を見つけられなかった子どもや貧困のために学校に行けなかった人たちに視点を据え、学校の本質は「人間が人間になるための教育」にあることを訴えた。また、『家族』や『息子』の中では、現代日本の崩壊していく家族や親子関係を見つめつつ、なおそこに人間のやさしさやぬくもり、人間成長の原点を求め続けている。それは、教育や学校そのものに関わるメッセージであり、また、現代家族の人間形成力に関わる問題提起であったといえる。



第5回受賞者 NHK名古屋放送局 「中学生日記」制作スタッフ



「中学生日記」は昭和47年4月から放映されている長寿番組。架空の「名北中学校」で、ほぼ素人の出演中学生の体験や悩みを土台に作られるドキュメンタリー・ドラマ。平成7年度児童福祉文化賞、第22回教育番組国際コンクール日本賞を授与される。

映像文化として優秀であると同時に、以下の点で一つの教育活動としても評価される。取り上げられるテーマが今日の中学校や家庭が抱える問題であること。制作過程で出演した中学生たちが、新たな個性を自覚し、成長を遂げていること。テレビメディアを通して広範な影響を与えたことである。テレビ番組が視聴率優先に走りがちの中で、「中学生日記」の歩みは現実の中学生たちのエピソードのドラマ化を通して、学校や家庭の教育再生を訴える「社会改革の戦い」であったといえる。

第6回受賞者 本吉 修二



昭和6年 大阪市に生まれる
昭和35年 東京教育大学大学院を修了
昭和40年 東邦大学専任講師になる（後に教授）
昭和53年 全寮制の「白根開善学校」開校
同校には、工芸技術・陶芸織染・情報教育等のための校舎が配置されている。また、学校林、学校スキー場等の野外活動施設も敷設されており、教育環境・施設設備が整えられている。

学校法人白根開善学校を創立するため、47歳のときに東邦大学教授の職を辞す。自己の資産の全てと賛同者の寄付により、群馬県六合（くに）村（標高1,100m）の山中に同校中等部を開校する。後に高等部と初等部が設置され、全寮制の小中高一貫校となっている。非行、不登校、知的障害等、様々な子どもたちを受け入れている。

「人はみな善くなろうとしている」が信念であり、同校の教育理念でもある。つまり、どの子どもも善くなろうとしているのであり、その意志や意欲が着実に育つように力を貸すことが教育者の仕事であると述べている。この揺るぎない信念に基づき、今日まで500人以上（受賞当時）の子どもたちの善さを引き出してきたのである。



第7回受賞者 黒柳 徹子



東京都、乃木坂に生まれる。トモエ学園に学び東京音楽大学声楽科を経て、NHK放送劇団に入団。デビュー後、NHK専属テレビ女優第1号となる。多方面にわたり活躍し、すでに数々の放送功労賞、芸術賞、文学賞を受賞している。

日本を代表する著名なテレビ・パーソナリティ、舞台女優、作家として活躍し、更には多方面で業績を挙げている。

しかし、見逃せないのは、子どもの生存と教育に関する尽力である。昭和59年よりユニセフ親善大使として多数の国々を歴訪。様々な危険を冒しつつ無数の難民の中に身を投じ、飢えと疫病と孤独に苦しむ子どもたちに愛と励ましのメッセージを伝えた。結果、ユニセフには多額の募金が寄せられた。

揺るぎない信念を持った真摯な実践の積み重ねは、「心の教育」が強く求められている現代の日本で、子どもへの愛と信頼を呼び起こし、子どもをとりまく社会諸悪に立ち向かう勇気を喚起させた。



第8回受賞者 児童養護施設 広島新生学園



昭和20年 広島市内で原爆孤児、戦災孤児、引揚孤児の収容施設として事業開始
昭和46年 東広島市に移転、社会福祉法人に
事業開始以来、養護した子どもは引揚孤児約200人、浮浪児600人、原爆孤児・戦災孤児および一般養護児童900人以上にのぼる。(数字は受賞当時)

当初の引揚児220人は、全員がマラリアやチフス、栄養失調等であり、創始者の上栗頼登は病児を日赤病院に背負って行っては死者を連れ帰り、茶毘に付す毎日であった。その後、多くの浮浪戦災孤児たちが収容されてきたが、施設から逃亡を繰り返していた。上栗は、逃亡する子どもたちが施設の貴重な毛布などを持ち出すことを黙認し、「2枚持ち出せばそれを闇市で売って4、5日は暮らせる。ひもじさから盗みをする前に保護しよう」と職員たちに語った。孤児たちに何度も裏切られながらも、彼らを「天使」と呼び続け、なおも愛を失うことはなかった。以降現在まで、このような子どもたちに対する愛と献身は一貫して変わることはないのである。

第9回受賞者 丸木 政臣



大正13年 熊本県に生まれる
昭和21年 熊本師範学校附属国民学校に就職
昭和30年 「私立和光学園」に赴任
現在は、同校の学園長及び日本生活教育連盟の委員長でもある。

新憲法・教育基本法に基づく新しい教育を戦後の教育現場で探究し、特に新生「社会科」のカリキュラム開発編成に力を注いだ。その実践例「水害と市政」は、昭和28年に熊本を襲った驚異的な台風の被害を中学生とともに調査学習したものである。「問題解決学習」の典型的実践として注目を浴び、高く評価された。

その後、私立和光学園に転任し、ベスタロッターの教育思想を源流とする「生活教育」を教育改革、学校改革の基本理念として同学園の歩みを導いてきた。また、和光大学の創設にも尽力する。

常に子どもを主人公とした学校創造のために、子どもの生活に根差して実践改革や学校改革を行い、和光学園の教育と経営に尽力してきたのである。



第10回受賞者 佐野 浅夫



大正14年 横浜市に生まれる
昭和18年 劇団苦楽座に入団
昭和25年 劇団民芸に参加

「セールスマンの死」「アンネの日記」などに出演し、「水戸黄門」の3代目黄門として人気を博した。

俳優であると同時に子どもたちへの「お話の語り手」。昭和29年にスタートしたNHKラジオ番組「お話でてこい」の語り手として、47年間4000回以上出演した(受賞当時まで)。創作童話の執筆や子どもたちへの読み聞かせを保育者や保護者にすすめる講演も行い、これらの活動に対し久留島武彦文化賞(昭和50年)、モービル児童文化賞(昭和53年)に輝く。テレビも絵本もなかった時代から47年間一貫して音声メディアによって多くの子どもたちに語りかけ、その情感を豊かにし、想像力を広げた活動は高く評価されるべきものである。

第11回受賞者 社会福祉法人 似島学園



昭和21年 原爆で家族を失った孤児や浮浪孤児の収容、保護を目的とし開設
昭和23年 児童養護施設としての認可を受ける
昭和27年 社会福祉施設としての認可を受ける
開園以来の保護児童数はのべ3,100人にのぼり、現在も100人余の児童、青少年が在園している。（数字は受賞当時）

児童福祉、障害児教育及び社会福祉を総合的に組み合わせた先駆的な教育・福祉活動を展開。学園の活動は、戦災孤児の保護から、経済成長時代の裏面で困難な状況に陥った子どもたちの救護へ。さらに社会や家庭のゆがみ、保護者による虐待に苦しむ子どもたちの養護、また知的障害者の自立支援と社会参加をめざす活動へと変遷している。しかし、学園の園訓「明るく元気に」、指標「働いて考え、考えて働く」、「生活教育（知）と人間教育（情）と労作教育（意）」にもとづき子どもたち一人ひとりを大切に、自発活動と自己向上を支援するという理念は揺らぐことはない。

第12回受賞者 九里 茂三



大正10年 山形県米沢市に生まれる
昭和20年 米沢興穡館中学校教諭として勤務
昭和31年 学校法人九里学園理事長に就任
昭和57年 九里学園教育研究所を創立
平成2年 学校法人九里学園学園長に就任

半世紀以上にわたる学校教師としての真摯な実践活動は、上杉鷹山、細井平洲の伝統を受け継ぐ米沢教育の成果として、高く評価されている。

また、私学教育・経営に関しても、自らの出発点を「徹底して私学であること」とし、自由な発想のもと、最善の教育内容・体制を樹立し、生徒一人ひとりを大切にすること、そこに一瞬の停滞も許されないことを訴え続けてきた。九里学園ではその姿勢に基づき、独自の教育プログラム、芸術やスポーツ、生徒たちの自主活動を中心とした優れた教育実践を展開する。関連して、国際交流や地域社会文化の発展についても、顕著な教育的文化的功績を挙げている。



第13回受賞者 中野 光



昭和4年 愛知県に生まれる
昭和28年 東京文理科大学教育学科を卒業
昭和34年 金沢大学等で教育学の教育と研究に尽力

大学教員、教育研究者としての業績は傑出し、研究業績は日本の教育実践を精緻に分析し、本質を浮き彫りにしたものであった。主要な位置を占めるのが、日本のペスタロッチ一運動史、運動を担った沢柳政太郎、野口援太郎、長田新に光をあてたことである。

「日本生活教育連盟」に参画し、委員長という立場で、日本の子どもの真の教育に取り組んでいる。さらに長田新や羽仁説子によって創設された、「日本子どもを守る会」の会長職を受け継ぎ、全国各地で未来を守る子どもたちの文化創造、平和希求運動、あるいは『子ども白書』の公刊により、今日まで広範で高い成果をあげている。



第14回受賞者 アグネス・チャン



1955年 香港に生まれる
(昭和30年)
1972年 「ひなげしの花」により日本で
(昭和47年) 歌手として活動を開始
1998年 日本ユニセフ協会大使に就任
(平成10年)

エチオピアの飢餓に苦しむ難民キャンプを訪問したことが契機となり、芸能活動のみでなく、ボランティア活動や文化活動にも積極的に参加するようになる。

「世界のすべての子どもたちに教育を」という願いをもって、世界の困難な状況におかれている子どもたちを訪問・取材している。そしてその窮状と支援の必要性を、講演活動やマスコミを通して世界に訴え続けている。

また、その講演やボランティア活動は、日本の教育や子どもたちに多大な影響を与えている。訪れた小学校では「世界の子どもたちへの応援メッセージ」を提案し、学校へ行けない世界の多くの子どもたちの存在に目を向けること、今自分たちに何ができるのかよく考えることを呼びかけてきた。



第15回受賞者 津守 眞



昭和元年 東京都に生まれる
昭和24年 「愛育研究所」で、発達に遅れを持つ幼児のための特別保育室を再開する
昭和28年 お茶の水女子大学に採用される
昭和30年 社会福祉法人「恩賜財団母子愛育会愛育養護学校」設立

お茶の水女子大学で、同大学附属幼稚園に通いながら常に実践を基礎とした発達心理学の研究と教育を進める。「乳幼児精神発達診断法」を開発し、子どもと関わる時間を中心に置く人間主義的研究法を洗練させた。58歳のときに同大学を辞し、それからの12年間は、全日を障害(しょうがい)をもつ子どもと過ごすことに捧げた。

大人の観点から捉えられたニーズを子どもに与えるのではなく、子どもと関わる中で子どもの興味と要求に応えることを保育の原則としてうち立ててきた。その原則から研究と保育が非分離であることを、自らの省察と実践を通じて示してきたことは最大の功績である。



第16回受賞者 梶地 三郎



明治39年 北海道釧路に生まれる
昭和15年 福岡女子師範学校に赴任
昭和29年 「しいのみ学園」を設立

「しいのみ学園」は、それまで教育界から無視されてきた子どもに居場所をつくり、そうした行き場のなかった子どもの親たちに拠り所を与える施設となった。以降、一貫して障害児教育に生涯を捧げている。その強い教育愛と心理学や医学に裏打ちされた理論によって、学会で注目される新知見の創発と子どもの成長の可能性を引き出す教材や教育法の開発が、不即不離に展開されている。新制福岡学芸大学(現福岡教育大学)においても、障害児教育の制度化を積極的に進め、常に先進的モデルを示してきた。その影響は日本にとどまらず、今なお世界へと広がっている。



第17回受賞者 松田 實



昭和16年 広島市に生まれる
昭和40年 石田学園山陽高等学校社会科教諭に着任
昭和48年 広島経済大学に移り、学生の就職支援を本業とする
平成16年 「ネパール学校建設支援協会 In ひろしま」を立ち上げる

観光で訪れたネパールで、ヒマラヤの麓に住まう人々の貧しい生活を憂い、支援の術を考える。土砂崩れを目の当たりにし、植林活動を始めるが、その休憩所として利用した学校の校舎がとてもそう呼べる代物ではなかったことに驚く。僻地の山村が貧困であり続ける構図を学校建設によって断ち切ることができるかもしれないと思い、私財を投じて日本国内にも資金協力者を募り支援活動を15年間続けた（受賞時まで）。平成17年には成果が認められてネパール国王より勲章が贈られた。多くの人に支えられて、建設した学校は100校以上にのぼっている。

第18回受賞者 西谷 英雄



大正15年 高知県に生まれる
昭和33年 「光の村職業補導所」設立
昭和44年 学校法人「光の村養護学校」開校、初代校長に
以降、障害児・者の自立を目指す私立の総合施設として、
大きく展開

「光の村」の教育は①暮らしの質を変える生活指導②体の質を変える体育③手の質を変える作業教育④言葉と生活の質を変える教科教育、の4つを柱として、新しい時代の困難に立ち向かってきた。生徒らは、寮生活を通して身の回りのことを自分でできるようになり、やがてフルマラソンに挑み、スポーツ大会で入賞するまでになる。知的障害者の就職率が10%台であるのに対し、「光の村」の卒業生の就職率は50%を超える。知的障害者を無能とみなす偏見はまだ根強いが、「光の村」の教育は、多くの実績によって、少しずつ偏見を打ち破ってきたのである。



第19回受賞者 金森 俊朗



昭和21年 石川県能登に生まれる
昭和44年 金沢大学教育学部を卒業
38年間、石川県内の公立小学校に勤務
現在は、北陸学院大学人間総合学部教授

「いのちの教育」と呼ばれる実践を行い、自身の学級を取材したNHKスペシャル「涙と笑いのハッピークラス—4年1組 命の授業」は2003年日本賞グランプリに輝き、また妊婦や末期癌患者を教室に招く「本物に触れる教育」は命の教育のモデルとして高い評価を得ている。教師が教えるスタイルはとらず、子ども自身の体験の中から、命について考えるきっかけを探る。腐敗した動物の死体の観察から命のつながりを学んだり、死に直面し生きることの意味をぎりぎり問うているひとの姿に触れたりすることで、子どもたちは家族を失った悲しみや自己を肯定できない辛さを友の前で語り始める。「命は大事」と説くだけでなく、その内実を子どもたち自身に探らせてきたことは、大きな功績といえる。

第20回受賞者 高谷 清



昭和12年 京都府に生まれる
昭和52年 滋賀県野洲市にある重症心身障害児施設
「第一びわこ学園」の常勤医師に
昭和59年 第一びわこ学園園長に就任

京都大学を卒業後、昭和40年に小児科の医師となり、重症心身障害児の療育に取り組むようになった。平成9年にびわこ学園園長を定年になってからも、医師として重い障害をもった子どものいのちが大切にされる社会の意義を訴え続けている。「人類はこれまで、心を寄せ、協力し、分かちあってきたのであり、福祉とはそうした人と人のつながりを意味するものである。」重症心身障害児の側に立つことによって得られた氏の言葉は、失われてしまった人々つながりを回復しようとする希望の言葉となっている。

第20回特別賞 あしなが育英会

あしなが育英会は、病気、災害、自死等で親を亡くした子どもたちや、親が重度後遺障害で働けない家庭の子どもたちを物心両面で支えることを目的として設立された民間非営利団体である。国などからの補助金・助成金は受けず、募金や「あしながさん」からの継続的な寄付金で運営されている。交通遺児の支援に始まる活動は40年以上にわたって多くの遺児を支え、ひとを想う気持ちを大切に社会の実現に寄与してきた。一度に多くの遺児をうんだ阪神大震災では組織的な取り組みが必要とされ、「神戸レインボーハウス」を建設して遺児の心のケアの拠点とした。現在は東日本大震災によって遺された子どもたちのために「東北レインボーハウス」の建設が進められている。